
キス×らぶ

白風 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キス×らぶ

【Nコード】

N6664P

【作者名】

白風 咲

【あらすじ】

「・・・なんでお前がここにいる。」

新羅 聖（ヒジリ）、14歳。男。一般的な中学二年生。

人懐っこい顔からは想像もできないような言葉の連鎖を得意とする、本当に『一般的』な中学校二年生。

「・・・てへっ」

倉野 麗（クラノレイ）、14歳。女。自称『聖の彼女』のただの幼馴染。

眉目秀麗の顔立ち、肩までストレート。可愛いしぐさが男の子の世

話心をくすぐる。

「聖つち〜？ おはよー・・・ってなにこのエロゲ展開」

海野 徹也、14歳。男。見た目はイケメン、素顔はヲタク。その名も、『エロゲーの徹也』。人の名前に『〜っち』をつける、サラサラのサラ男。

「何？ 徹也、立ってたら前見えないよ！」

神風 美柳、14歳。女。なぜかつかみどころがない天然スポーツ少女。スカートの中身は ひ み つ 。 ショートヘア+ヘアピンの組み合わせ。

「・・・ずるい・・・」

白霧 美羽、14歳。女。文学少女。常に冷静沈着で計算高く、成績はSSS認定。世間的に言われる『クーデレ』。腰まであるその髪の毛はなかなかのクセっ毛。

こんなメンツでお送りする、スーパーハイテンションファンタジー学園ラブコメディ。

魔法世界に降り立った今までにないようなハイテンションのお送りしたいと思います。

とくと、ご覧あれ。

〈誕生×奇跡〉(前書き)

コメ、感想、いくらでも受け付けてるんだからねっ！

べ、別にほしいわけじゃないんだから！

え？　じゃあしない？

あう・・・感想・・・ください・・・／＼

〈誕生×奇跡〉

〈プロローグ〉

「産まりましたよ！ 元気な男の子ですっ！」

わが子をいしましたが産んだ母親は、安心したように笑って目を閉じた。

「先生、始めましょう。」

「ああ。『血の盟約』のための指輪精製だ。」

ひたすらに産声をあげている生まれたばかりの小さな体を抱きかかえ、先生と呼ばれる人と、一人の看護師と一緒に部屋から出て行った。

部屋の外に出るとそこには顔を輝かせている男性がいた。その男性は看護師にさえぎられるまで何度も何度も先生に頭を下げてお礼を言った。

「これからこの子の『指輪』を作らねばなりません。それでは後程。」

半強制的に男性をはねのける看護師に先生は苦笑いをして、軽く男性に会釈し、先に行った看護婦の後を追いかけて行った。

「どっした？」

少し遅れて先生が精製室というところに入っていくと、中は沈黙に包まれていたから、思わず先生は聞いた。

「どうもこうも、先生。このデータを見たらその理由がわかります。」
「
白衣を身にまとった研究者のような人が一人、今さつき採取できた血液データを手渡してきた。」

「・・・なんだ・・・っ！ これは！」

通常、産まれたての魔法使いの血液は人生の中で最も大きな魔力を持つているということが、長年の研究から明らかになっている。数値に表すとざっと5〜6万。そこから時間がたつにつれてだんだんと落ちていき、その人の魔力の『安定した値』へとそれぞれ落ち着く。

しかし、今研究者たちの目の前にいる赤ん坊の魔力指数は、こうしている間にも8万、9万と、とどまることなく上がり続けている。

驚くべきことはそれだけではない。普通であれば、自分の限度を越した魔力を出すことは物理的、人間科学的には不可能であり、赤ん坊の時のそれがその人の最大魔力とされる。限界突破は、『肉体の破壊』を意味し、自らが魔力に飲み込まれるとされている。

つまりこの子供、現段階で『常に限界突破』しているのにもかかわらず、自らの魔力に押しつぶされることもしていない。常識を覆しているのだ。

「10万に・・・なってしまった。何故止まらない!? 何故この子は自らの力におしつぶされないのだ!? 私たちのほうが・・・耐えられないではないか！」

「先生、魔力安定剤の投与の許可を！」

先生はいまだに止まらず上がり続ける数値を見、少し戸惑った。

『止めてはいけない』

何故そう考えたか自分でもわからない。だが、自らの本能が言っている。これは、止めてはならないと。そう考えた先生は、体が内から光り輝いている赤子に目をやってから、叫んだ。

「特別緊急措置に入る！ 全員部屋から出てこの部屋にあらゆる防御呪文を施せ！」

「先生！ ほかの患者もこの病院にはいます！ 被害が出た後では遅すぎます！」

「私がさせない。それだけは私がさせない！ 全員、外へ！」

やっとしゃべれるような状態で先生はそう叫び、あふれ出る魔力に押しつぶされまいと必死で部屋を出た。

一人、また一人と、先生に続いて皆が部屋から出た後に、先生は言った。

「全力で外側から防御を！ 我々の普通の力を結集させてもこの魔力にはとどかない！ 全員、死ぬ気でやれ！」

先生の合図とともに、それぞれがはめている指輪から色とりどりの光が飛び出し、銀色に輝く部屋を周りから保護する。

「・・・先生。このデータを。」

「今でなければいけないか!？」

「はい・・・。」

新たな紙切れを差し出された先生はそれを読んで驚愕した。

どつりで私たちごときが抑えられないわけだ。

「・・・創造者と同じ・・・だと?」

先生がそう言った途端、銀色の光は突如消失し、皆があっけにとられた。

「・・・指輪を!」

早く精製しなければならない。

一早く部屋に舞い戻った先生は、そこに広がる光景を見て、呆然と立ち尽くした。

「指輪を・・・自分で創っただと?」

きやつきやと笑う赤子の手には銀色に輝く宝石のはまった指輪があった。宝石の中は、なぜかわからないが波打っている。

測定器をふと見た先生は、誰かに見られる前にそのコンセントをきって液晶を消した。

表示数値は、・・・『測定不能』。

赤ん坊はきゃつきゃと笑い、事の重大さを全く理解していないようだ。

「せ、先生・・・」

肩で息をし、顔はあまりの形相だったに違いない。看護師の一人が心配そうに、そして気を遣いながら話しかけた。すると、先生は力なく言った。

「ここで今起こった事象はすべてなかったことにする。指輪は私たちが作った。赤ん坊は何もしていなかった。なされるがままになっていた。分かったか？ いずれ時がくる。それまでは決して他言無用だ。分かったか？ 分かったのか！？ どうなんだ！」

先生は声を張り上げた。

「この子をご両親のもとへ。」

一人の看護師がそういわれてあせあせと動き、赤ん坊を抱きかかえて部屋を出て行った。しかし、その部屋には、いつものような指輪精製後の一仕事終えた解放感はなく、重苦しい空気があたりを満たしていた。

学園×入学（前書き）

悲しかや

闇夜に浮かぶ

緋色月

感想待ってます／／／

学園×入学

(起きなさい！)

誰かが俺を呼んでいる。カーテンの隙間から差し込む春の太陽の暖かな光が、かすかにきらめいて俺の顔面の降り注ぐ。そんな清々しい朝にいったい誰が俺の安眠を邪魔するというのだろう。

(今日は買い物に行くって言ったのはどこのどなた！？)

朝からうるさい声にいらだちを覚えて、寝返りを打って布団を頭からかぶる。そうした俺の目の前に、指にきれいにはまった銀色に輝く宝石がはめ込まれた指輪が目に入る。

少しの濁りも見せないその輝きは無言で訴えてくるようだ。

『まだか、まだか。』と。

不思議な感覚に酔いしれて、残念なことにすっかり目が覚めてしまった俺は、部屋をぐるりと見渡した。机があつて、緑掛ったカーテンが揺らめき、お気に入りの本を雑に詰め込んだ本棚があり、般若のお面があり、そして極めつけは壁に貼られた、所謂『萌え』要素満点のポスター。

………待て。ちょっと待て。いま、俺の最高にいい環境の中に一っただけ不要なものがあつた気がする。

俺はそう思ってよく目を凝らしてもう一度部屋全体を見回してみた。

するとやはりおかしいのである。さつきはドアのところ立っていたはずの般若のお面が、今は俺の寝ているベッドにかすかに近づいてきているではないか。

「……待て。待て待て待て。般若のお面が『立っている』だど？ そんな意味不可解な現象がこの世にあってもいいものだろうか。お面は立たない。なぜなら足がないからだ。」

「……ああ、なるほど。」

「これは夢だな……」

「永眠したいのかしら、聖？」

なんと、般若のお面がしゃべりかけてくるではないか。しかもよく聞きなれた、身近にいる女性の声色を使って。

「お面ってしゃべれたんだな。」

「何意味の分からないこと言ってるのよこのバカ息子。」

「……これは般若ではない。ましてやお面などでもなかった。俺はあまりの変貌を遂げたその女性に一言、言葉を投げかけた。」

「……すいませんでしたお母様。」

よく見るとそれは我が母親であった。しかしながら目の両端はつりあがり、昨日の夜までの美しい笑顔はどこへやら。その顔面はMK5（マジでキれる5秒前）というやつであろうか。大変見るに堪えられない怒りと憎悪の念がこもったお顔をしていらっしやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6664p/>

キス×らぶ

2010年12月31日02時05分発行